

2010年9月の研究会のテーマは「ノンセクション+米国製を除く6×9判を超えるカメラ」でした。

研究会報告(その1)に小林昭夫会員の「6×9cm判を超えるカメラ」についての発表がありました。その内容は研究会報告(その1)に掲

載致しました。続いて高島会長の司会で持参カメラの紹介がありました。異常気象で9月に入っても続く暑さのせいか今回の研究会出席者がいつもより少なく、少し寂しい研究会になりました。当日の持参

カメラについては持参カメラリストをご覧ください。

当日の持参カメラの主なものの写真を掲載しました。

(編)

研究会報告 「6×9cm判を超えるカメラ」

会員番号0790 小林 昭夫

今回の研究会テーマは「アメリカを除く6×9cm判カメラ」であるが、ロールフィルムで画面サイズの話をするコダックについて紹介せざるを得ないので、本稿では「アメリカを除く」を省かせて頂いた。持参したカメラは第1期のツァイス・イコン・カメラ展で出品したものの一部である。

6×9cm判を超えると言うと、それ以上のカメラは全てが対象になってしまうので、まず打ち止めとなる上限のカメラを調べてみた。

文献によれば過去に作られた世界最大のカメラは写真1(「日本カメラの歴史」、毎日新聞社編より)に示すもので、画面サイズはなんと1.4×2.4mと巨大なものである。面積にすると3.36㎡、すなわち畳二枚分の一坪に等しい。カメラの重量は4.7トンあり撮影には15人を要した。発注者はアメリカのシカゴ&アルトン鉄道会社で、製造年は1898年頃である。写真を見るとネクタイをしてチョッキを着た者が7人カメラについており、彼らが撮影技師らしい。また後ろにも腰をおろして休んでいるグループが居るので、彼らはカメラの組み立てや分解のための作業者であろう。カメラ本体の支柱は非常に華奢で押せば倒れそうであるが、一見して組み立て式であることが分かる。蛇腹には落ち込まないような支えがついている。このカメラで撮影された写真は1900年のパリ万国博覧会に出展されたそうだが、どんな写真だったか調べ切れなかった。

日本では明治35(1902)年頃に鹿嶋清兵衛が小西本店に発注した91×111cm判の暗函(クラシックカメラ専科10号、小西六特集より)が最大と思われる。この画面サイズは全紙の4倍で前者と比べると小さいが、やはり常識破りの大画面と言える。AJCCの第1回撮影会で記念撮影に使われたカメラの画面サイズは全紙判なので、それより4倍もある。鹿嶋清兵衛は当時写真に金をつぎ込んだ大アマチュアであり、このカメラは九代目団十郎を

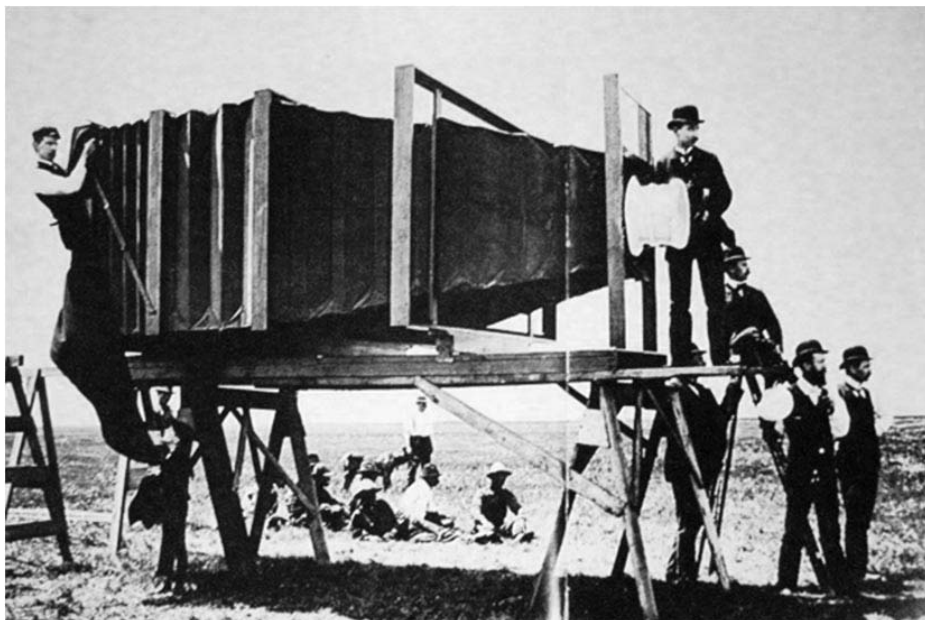


写真1 1898年頃つくられた世界最大のカメラ (「日本カメラの歴史」…毎日新聞社編より)

撮影するために作ったと言われる。残念ながらカメラの写真を探し出せなかったが、製作は長谷川利之助で六櫻社が発足する時期と重なっている。

次に前述のような特殊なカメラでなく、6×9cm判を超える市販感材を使うカメラについて述べる。表1はコダックが発売したロールフィルムと、そのフィルム用に同時に発売されたカメラである。コダックはこれ以外にも多種のサイズを発売しているが、この表の上3欄はドイツで一般的に用いられたものである。コダックが販売した最大のロールフィルムは1893年に発売した八つ切り判の16.5×21.5cmで、カメラはNo.6フォールディングコダックであった。フィルムに番号がつく以前の発売である。ツァイス・イコンのカタログから見ると、116(6.5×11cm)、118(後に124となる。8×10.5cm)、122(8×14cm)が標準になって

おり、他のヨーロッパメーカーもほぼ同様である。

表2は乾板およびシートフィルムの代表的画面サイズを示したものである。イギリスでは手札判(クォータープレート3¼×4¼ in、8×10.5cm)、キャビネ判(ハーフプレート4¾×6¾ in、12×16.5cm)、八つ切り判(ホールプレート6½×8½ in、16.5×21.5cm)といった使い方をした。一方ヨーロッパ大陸側では大陸手札判(9×12cm)、10×15cm判、大キャビネ判(13×18cm)が一般的であった。またプレス用にアメリカでは四の五判(4×5 in、10×12.5cm)が多く使われた。この表以上では六つ切り判、四つ切り判、半切判、全紙判などが作られた。

図1は、ツァイス・イコンの1931年版カタログからとったコカレットの種類を示すものである。コカレットはコンテッサ・ネットル時代に

表1 コダックの6x9cm判を超えるロールフィルムと発売カメラ

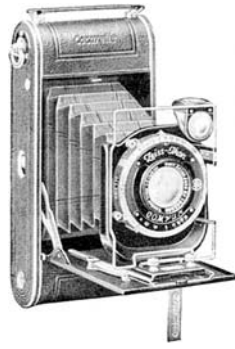
フィルムNo	画面サイズ (cm)	発売年	発売カメラ
116	6.5 × 11	1899	No.1A フォールディング ポケットコダック
118(124)	8 × 10.5	1900	No.3 フォールディング ポケットコダック
122	8 × 14	1903	No.3A フォールディング ポケットコダック
	16.5 × 21.6	1893	No.6 フォールディング コダック

最初に発売され、ツァイス・イコン時代にも継続生産されたベースボード型フォールディングカメラで、ロールフィルム専用機である。5種類の画面サイズがあるが、今回のテーマに相当するものでは前述のコダックのフィルム番号116、124、122に合うカメラが作られていた。なおツァイス・イコンはフィルムも作っており、図中のフィルム表示にアルファベットが付いているのはツァイス・イコンのフィルム記号である。

図2は同じくニクセの種類を示すものである。ニクセは、最初にデュンシエから1900年頃に発売されたロールフィルムと乾板兼用のベースボード型フォールディングカメラで、イカの時代さらにはツァイス・イコン時代の1936年にも新モデルが発売された大変息の長いカメラである。イカ時代以後はイカレットが116フィルム用の6.5×11cm判以下、ニクセとロイドおよびハローが8×10.5cm以上に分けられた。ニクセは二段伸ばしのこの種カメラの最高級機で、イカレットの6×9cm判二段伸ばし機と同一構造にしたためか、この頃のカタログではイカレットのグループとして扱われている。8×14cm判が最大のカメラであるが、兼用となる乾板のサイズは9×14cmとやや特殊なものになっている。

写真2は前述のカタログより前の1928年に作られたニクセ8×14cm判(城靖治さん所有)である。公称画面サイズの縦横比は1.75:1なので非常に細長く、かつ大きく重い(1.5kgもある)。レンズはテッサールF4.5、150mm、シャッターは旧コンパーである。

次にテーマに沿う3台のロールフィルムカメラを紹介する。写真3はロールフィルム専用のハロー8×10.5cm判(城靖治さん所有)で、ツァイス・イコン時代のものである。ハローは最初にドクター・クリューゲナーから発売されたカメラで、イカそしてツァイス・イコン時代の初期まで作られた。イカ時代まではロールフィルム専用機と乾板兼用機の2種類があり、サイズもこれ以外に8×14cm判があった。しかしツァイス・イコン時代にはロールフィルム専用機で、サイズもこれのみになりかつ廉価判に位置付けられている。一段伸ばしでレンズシフトはできず、ワイアフレームファインダーも無い。本機のレンズはテッサールだがF6.3、

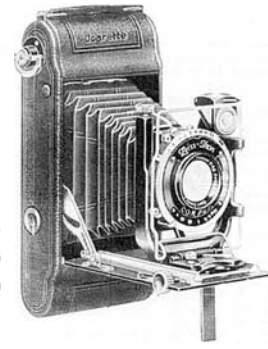


Cocarette

Die Beliebte

Für Rollfilm:

5×7,5 cm (für Rollfilm N)
6×9 cm (für Rollfilm B II)
6,5×11 cm (für Rollfilm D)
8×10,5 cm (für Rollfilm E)
8×14 cm (für Rollfilm G)



Icarette (Nixe)

Die Vielseitige

Für Rollfilm u. Platten

Bildgrößen:
für Rollfilm für Platten
6×9 cm 6,5×9 cm
8×10,5 cm 9×12 cm
8×14 cm 9×14 cm

図1 コカレットの種類
ツァイス・イコンの1931年版カタログから。

図2 ニクセの種類。このカタログではイカレットのグループとして扱われている。

135mmである。

写真4は8×10.5cm判ロールフィルムと乾板兼用のロイド535である。ロイドはヒュティッヒから最初に発売されたカメラで当初はコダックに似た各種のカメラがあった。本機はイカが発足した1909年頃のロイドで、当時の高級ロールフィルムカメラの典型的な構造をしている。赤紫色の蛇腹は二段伸ばし、レンズの上下左右へのシフトが可能、水準器付きで、シャッターにはコンパウンドが使われている。またボディは木製だが当時高級金属だったアルミがレンズボードやベースボードに使われている。ロイドもツァイス・イコン時代まで作られたカメラで、ハローよりは長く残った。

写真5はドクター・クリューゲナーが1898年頃に発売したパトローネン・フラツハカメラで、ロールフィルムと乾板兼用機である。画面サイズは10×12.5cm、すなわち四の五サイズの119フィルムを使う。写真6の上は裏蓋を外したもので、乾板を挿入できる状態になっている。下はさらにその内側を外してロールフィルムを装填できるようにしたものである。

図3は、前述と同じくツァイス・イコンの1931年カタログにあるイデアールの種類を示すものである。イデアールはヒュティッヒから最初のもので発売された二段伸ばしの乾板用フォールディングカメラで、ツァイス・イコン時代でも1930年代後半まで製造された。3段伸ばしの

表2 6.5×9cmを超える 乾板とシートフィルム

通称	呼び寸法(inch)	呼び寸法(cm)
手札(クォーター)	3/4 × 4/4	8 × 10.5
大陸手札		9 × 12
四の五	4 × 5	10 × 12.5
		10 × 15
キャビネ(ハーフ)	4 1/4 × 6 1/2	12 × 16.5
大キャビネ	5 × 7	13 × 18
八つ切(ホール)	6 1/2 × 8 1/2	16.5 × 21.5

超高級機であるユニバーサルジュエルを特殊なカメラとすると、イデアールは一般市販機としては最高級の乾板カメラである。レンズ交換可能で、単にレンズを上下左右にシフトできるだけでなく、ベースボードをボディに対して90°以上あるいは以下にセットできる。画面サイズは4種類で、6.5×9cmを超えるものとして、9×12cm、10×15cm、13×18cm判がある。



写真5 パトローネン・フラツハカメラ 10×12.5cm
ドクター・クリューゲナーが1898年頃発売した
ロールフィルムと乾板兼用機

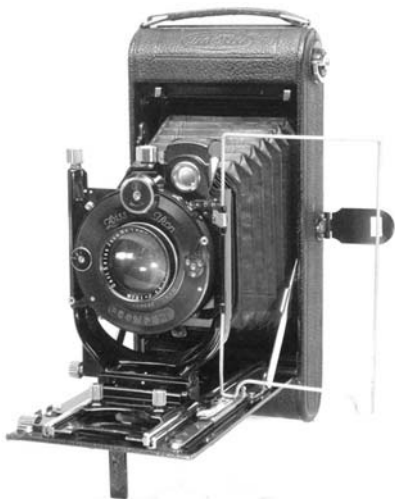


写真2 ニクセ 8×14cm
1928年に作られた製品(城靖治さん所有)。

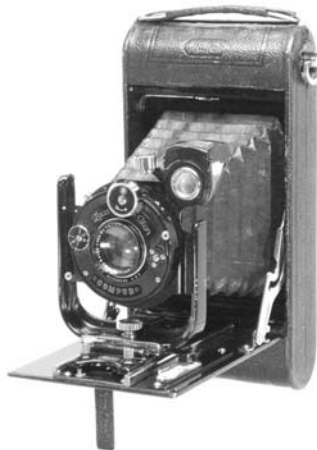


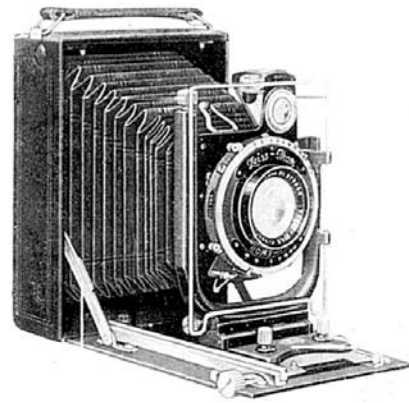
写真3 ハロー 8×10.5cm
(城靖治さん所有)



写真4 ロイド 535 8×10.5cm
ロールフィルムと乾板兼用機



写真6 上の写真はパトローネン・フラッハカメラの裏蓋を外したもので、乾板が挿入できる。下の写真はさらにその内側を外してロールフィルムが装填できる状態を示す。



Ideal

Die Camera für den Kenner

Doppelter Auszug

Für Platten und Film packs

6,5×9 cm
9 ×12 cm
10 ×15 cm
13 ×18 cm

図3 イデアールの種類を示すページ(1931年のカタログから)。

写真7は前述のカタログより前の1928年に作られた9×12cm判イデアール225で、シャッターはまだ旧コンパーである。レンズはテッサー135mm、F4.5が着いている。

以下乾板カメラを4種類紹介する。写真8は1906年にドクター・クリューゲナーから発売されたデルタクラップで9×12cm判である。ボディは木製で、蛇腹は1段伸ばし、ファインダーはベースボードに着けられた反射ファインダーだけが独特の風格がある。シャッターの空気シリンダーとレリーズを繋ぐ支点部分に、Dr. KrügenerのDとKを図案化した円盤が付いている。

写真9は同じく1906年頃に発売された9×12cm判のベラフィックスで、2段伸ばしの縦型ベースボード型フォールディングカメラである。当時の代表的な鳥居は、写真4や8および10のように下部のベースの上に細い丸棒を立てその外側を囲う部材をスライドさせてレンズシフトを行っていた。その結果レンズボードの固定が強固でなかった。本機は鳥居をコの字型の断面を持つ金属一体型の構造にし、その垂直部分に回転自在の長いピスを固定して、レンズボードと一体のナット内を回転させて上下方向のシフトを行うようにしてある。左右のシフトも同様な構造が採用されている。レンズの固定を強固にでき、後の主流になる構造である。

写真10は、1906年にエルネマンから発売された2段伸ばしの9×12cm判のヘアクXIIである。黒革張りのボディに赤紫の蛇腹、アルミ

製のレンズボードとベースボード、ニッケルメッキが多用された金属部品のバランスが良い。保存状態もよくアルミの腐食や金属部の疵もほとんど無いので大変美しいカメラである。

写真11は、1912年にC.P.ゲルツから発売された2段伸ばしの9×12cm判マヌフォク・テナックスである。テナックスには、アウトフォクテナックスと名付けられたスプリングカメラ式の乾板カメラがあり、本機は手でレンズボードを引き出すためマヌフォクと付けられている。レンズにはダゴールF6.8、120mmが使われている。本機には写真12に示すようにベースボード上にレールと一体化した大きなGOERZの切り抜きがある。



写真7
上記カタログより前の1928年製イデアール225。



写真10 ヘアク XII型 9×12cm判、1906年エルネマンから発売。金属部品が美しいカメラである。



写真11



写真12



写真8 デルタクラップ 9×12cm判
1906年ドクター・クリューゲナーから発売された。



写真9 ベラフィックス9×12cm判、鳥居をコの字型断面をもつ金属一体型にし強固なものにした。

写真11および12 マヌフォク・テナックス9×12cm
ベースボードにGOERZの切り抜きがある(写真12)。